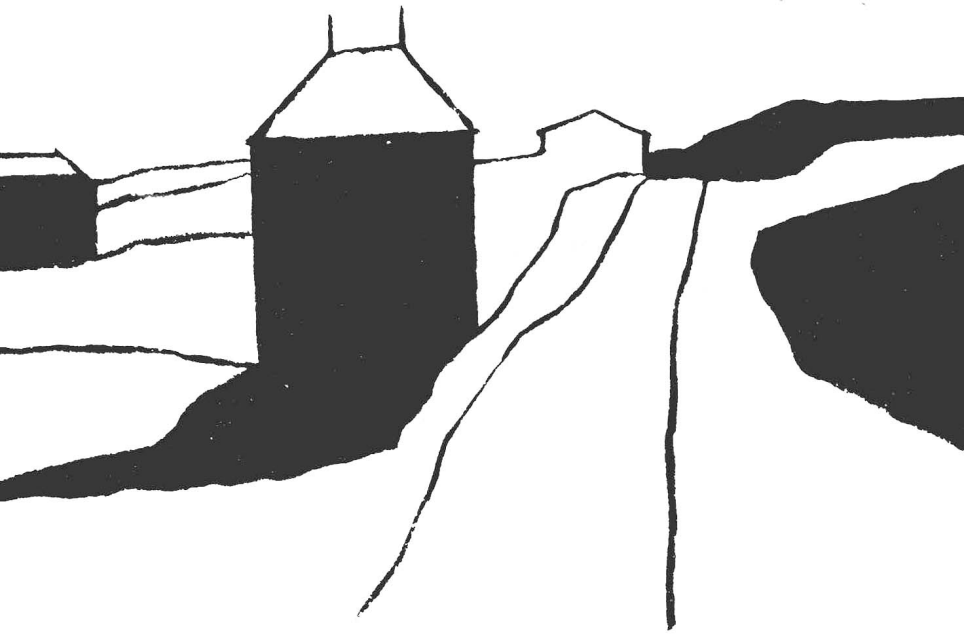
富士正晴

どうなとなれ

中央公論社

正晴

どうなとなれ



中央公論社

どうなとなれ

昭和五十二年六月五日初版印刷
昭和五十二年六月十五日初版発行

著者　富士正晴
発行者　高梨茂
印刷　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京二―三四
©一九七七　検印廃止

目次

どうなとなれ　3
どうなとなれ(二)　67
坐っている　143
こころならずも…　165
花柳芳兵衛・母恋　185
玉山倒壊　225
牧野の殿には大閉口　245

装幀　大沢昌助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どうなとなれ

物を書くのが全く億劫だなという気が段々つのって来る。しかし、書かねば生きてゆけない。生きてゆけないというのは生き甲斐がないという風な精神的なことがらではない。

若い頃のジイドは、書くことを禁止されたら、ぼくは死ぬだろうといったそうな。

それを読んで、若い頃であったけれど、わたしは馬鹿馬鹿しく思った。何を大仰な、書くことを禁止されたら死にたい程の書くことがあるのかい。しかし、ジイドにはそういう種類の書きたいことがあるのだろうとも思っていた。ジイドは情熱でカッカと燃えたぎっていて、エネルギイを書くことによって放出しなければ、たまったエネルギイで爆発してしまうのであろう。おれにはそんなエネルギイはなさそうである。だから、書くことを禁止されても死んだりはしない。そう感じていた。

このジイドの言葉と対になっているヴァレリの言葉も読んだ。若い頃のヴァレリがいったことになる。それは、書くことを強制されたら、ぼくは死ぬだろう、というのだ。

わたしはこの方に賛成であった。エネルギイをひとに強いられて使用してたまるかという頑固

な不服従の精神とまでは思っていなかったような気がする。しかし、気分的に賛成であった。
その頃のわたしは二十代で、今から思うと呆れる程の数の詩をかき、しかもそれが大抵長詩であって、毎日書かないと物足りない気がしたのであった。しかも、ヴァレリのいい分に共感していたとはどういうことなのだろう。その理由は今でも幾分判るような気がするが、それを的確にいうことは出来ない。幾分しか判らず、全体はあいまいもことという状態であるからだ。
女はほんとにきれいだなと思うことが時々ある。しかし、それを所有したいなとか、触れてみたいなとか思うことがない。
女はほんとに汚いなと思うこともある。しかし、それを侮辱したいなと思うことはない。
大抵は関係ないような気持がしている。つまり、女の方も、関係ないなと見ているような男にわたしがなっているということであろう。
「拝読するのに、えらい無残な心境ですな。しかし、書けと強制されたら死ぬだろうというヴァレリの意見にひどく同感されている割に、あなたは沢山書きますなあ、この頃。武田泰淳さんが、あれはどういうことなのだろうと不思議がっておられたそうですよ。強制されてるんじゃなくて、自ら進んでお書きになってるんですか」
「自ら進んで書きたいような事柄はもうずっと前からないよ。浮世の義理で書いているんだろう。よみたい本をよむ余裕がないのがつらいな」
「浮世の義理ですか。義理は強制にはならんのですかな。半ば強制みたいな気がしますけれど」

「そうなると判らん。しかし、まだ一向に死にはせんからね。死んだって別にかまわんけれど。知ってる奴が続々と死んでゆくからな。ちょっと死にすぎるという感があるけれど、六十すぎたら死んで何の不思議もないしなあ。知ってる人が、気がついてみたら、一律に六十を越えていたり、七十を越えていたりするよ。おれ自身、とっくに還暦はすぎた。物忘れがよくなったよ。人の名前をど忘れするのは当り前だが、人の顔までこの頃ど忘れすることが、間々あるみたいな気がする。ボロボロになりかけてるのかも知れん。ものを詳しく調べたり、深く考えたり出来なくなったな。陶淵明が深くは解を求めずてなことを書いているのをしゃれているなと前には思ったけど、今はあれは陶淵明がとしをとって、真実とか正確とかを追求するのが面倒臭うなっただけなんや、それだけのことらしいなと思うようになって来た」

「陶淵明がもうろくしかけたということですか。駄目になって来たということですか」

「駄目になって来たんやろな。しかし、こっちももうろくして来たためか、あの陶淵明の態度が、はなはだ好きになって来たね。ああ、ええなあと思うわ。すると、女などどうでもええやんか、面倒やと思うようになって来た。判らんものになって来た。そこで、はなはだしくは解を求めず、や」

「さっきは深くはと言われましたよ」

「どっちでもええんや。大したちがいはないわ。どっちにしても大したちがいはあるもんか、面白かったらそれでええんやちゅうのが淵明の真意やで」

「もとの本を調べないのですか」
「そんなことしたら、はなはだしく解を求めることになるんや。書物の上で腹上死することになる。老人は自分をいたわらんとな」
「猥談みたいなことおっしゃいますな。そうですか、腹上死しますか。ほほう」
うなじをそらしての、このほほうがはなはだ気にくわない。うなじをそらすから、目の玉の黒いところが目の下の方へくる。つまり下目づかいになり、いかにも感心し、おどろいているような声音と全くうらはらの軽侮の感がにじみ出てくるようにしか取れない。
「ほほう、か。よう言うわ」
「よう言うわって何ですか。ほほうがいかんですか」
「いかんね。ばかにされてるみたいな感じになるな、こっちは」
「ばかになんかしてませんよ」
「みたいな感じになると言うてるだけや。ばかにされてはたまらん」
「ばかになんかする筈がないのになあ」
相手は不審顔であり、どうかするとちょっとだけ憤慨顔に傾きそうな気配になる。やわらかではあるが、そんなこといわれるのは心外であるというような表情になるということだ。
「姿がわるいのかな。とにかくね、あんたこの頃、週に一人ずつ、どういうかな、亡んでゆきそうな仕事を守っている老人に逢いに行って、その話をきいて、それをルポルタージュみたいに書

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いてるやろ。村の鍛冶屋やら、番傘つくりやら、くろもじの手作りやら、そんなのをやってる人の話。その時、話をひき出すために、円滑にしゃべりつづけさすために、仰山に感心して合槌を打つやろ。その老人の工人向けの合槌の打ち方が癖になってしもうてるんや」

「ほほう。いや、失礼しました。この、ほほうですか」

「今のほほうはまだましや」

「ましですか。そしたら、ましでないほほうはどういうのですか」

「大げさになりすぎて、首をそらして、大びっくりするからいかんのや。それは、老人向けのほほうやで。もっとも、老人は鈍感になっているから、そのぐらいに大仰にやらなこたえんかも知れんな。テレビの子供相手の歌うたいや、お話のお兄さん、お姉さんの仕ぐさや表情が照れくさいほど大袈裟であるのと、わけは一緒やな。老人も子供も鈍感なんやろな。そやから、その場合はそれでええねんや。しかし、おれは子供でも老人でもないから、そう大仰に感心して合槌打たれると、照れくささの余りに、ちょっとむかつくわな。おれは老人やないんやから、いや、還暦すんでの老人やけれど、そう鈍感やないつもりやから、感心したような声音や、うなじそらしは必要ない。合槌打ついうことは相手によってむつかしいもんやで。やたらに賛成されたり感心されたりすると腹が立つことがあるよ。余り反対ばかりされたり、疑い深うされても腹が立つやろけどな。だから、人の話をきくのは」

「ほんとにむずかしいですな」と相手はすらりと引き取ってしまった。あほらしくて、もうその

先をつづける気がしなくなる。相手の方が上手(うわて)である。しかし、慇懃無礼の気味がないでもない。大新聞の古参記者や、週刊誌のトップ屋や、テレビの司会業者には、この点、はなはだ手ごわい代物がおるようだ。玄人なのである。こっちは赤子だ。ひょいとひねられる。

「こないだ紀州の炭焼のこと書いてたなあ」とこちらは別の話題にうつる。ひねられ通しではつまらない。

「はい、書きました」

「あれ、ビンチョウとか何とかいうらしいが、樫の炭で、ものすごく固いなあ」

「はあ、固いです」

「うなぎ焼くんやろ」

「そうです。しかし、この頃はガスで焼けるいい器具が出来ていますからね。それで、段々だめになったんです。来年は焼けるかどうか判らんというていました。あの記事にも書きましたけれど」

「ああ、それは読んだ」

別に彼を感心させるようなことはいわなかったから、もう、ほほうとはいわなかった。しかし、これからインタビューに行って、ほほうと合槌を打つとき、少し意識するだろうなと思い、いらんこと言うたなと、ほんのちょっぴり後悔した。まあ、どうなとなれ、だ。

浮世のことが判らない。判らぬところへ出て行くのが厄介だから、浮世からなるべく離れてい

る。しかし、浮世と交らねば飯が食えない。その位には浮世と関係がある。

家族というものがいる。これは浮世の中に生きているから、浮世は家族という形をとって、ぴったりとくっついているのだから、浮世はやはりわたしを放しはしないわけだ。竹林の仙人などと、仇名はつけられているらしいが、竹林は大方枯れ果てて雑木林になっているし、わたしは仙人などというものとは程遠い。せん人とどうしても言うのなら、何にもせん人とぐらい言ってもらいたい。だが、これはわたしの希望であって、中々何もせんというわけには行かないのだ。

何もせんのを理想としているのだから、雑木林の読書人ぐらいがいいところだが、それがこの頃は一向に本をよめず、雑木林の雑文屋と雑が二つも重なりそうである。雑、全くそのような気がする。雑然たる室にくらし、雑然たる文章を書き、雑然たる思いで世界を坐視し、雑然と老いつつある。この雑の中に女が入っていないのが、いかにも当然で、いかにも不思議といった気がするのは何故だろうか、ほん稀に考えることがあるが、この不景気な状況も雑然と考えるばかりである。つまらん状況なのではないかと思って、一つ恋愛小説でも書いてやろうかと、ひとに宣言したことが最近あったが、書けるわけはないのである。一休みたいにカッカと燃えている人格ではない。

「近頃どうかね。変なものばかり書き廻っているようだけれど、ちゃんとしたもの余りないようだな。小説は書いてるのかね。表芸をおろそかにしてはいかんなあ」

「表も裏も、たてもよこもないわ。つまらん文章かいてるだけよ。みんな有り合わせみたいなも

んや」
「有り合わせか？……そうじゃあるまい。相当、間に合わせの感があるよ。ふん」
「責めなさんなや。涸渇しているんやから。本当はなんにもないんやろと自分では思うてるんや。内容皆無。面白うもおかしくもない。恋愛でも一ちょうやったら、何とかなるか知れんが」
「そりゃ、無理だね。お主は冷え切ってるみたいだからな。内容皆無とはよく言った。内容皆無で、情熱これまた皆無か。ユメもチボウもナイという奴か。ユメもチボウもないが金だけはあるという奴もいるが、お主は金もない」
「希望はないか知れんが、おれはこのごろ夢は割合みるぜ。余り希望に満ちた夢などみたことないがな」
「当り前じゃないか。希望のない奴が希望に満ちた夢などみられるもんか。絶望すら所有しておらんではないか。のっぺらぼうよ。脳のしわが浅くなって行っているのよ。深く刻まれたものが何もない。つまらんね、のっぺらぼうでは」
「夢の中で、おれは余り絶望していないんやけど、その夢の中でのおれの状況はまあ絶望的みたいなんやな。そういう夢をみるね。出口なしみたいな夢をみる。しかし、その中で、おれは出口なしに余り苦しんでるみたいではなし、割合あわててもおらんわな。毎朝のように見るぜ。そして目がさめると、必らず腹がはっているから不思議やね。屁がたまって夢をみるのかな」
「ツガもねえな。しかし、どんな夢をみるんだ。筋があるのかい」

「おれは中国人であるらしかったな」
「そりゃどういうことだ」
「夢の中でやないか。しかも、現在の中国でやで。そこでおれ、中国人」
「ご苦労なことです」
「いや、苦労したよ。見ている時は一向にそのことは考えなんだが、覚めて考えてみると、おれが華国鋒の側か、江青四人組の側か、どっちだったかよく判らん。判らんが何か政治的トラブルにまきこまれておる。それでそのトラブルをどうやって、脱出するか、片づけるか、そのどっちだったか判らんが、とにかくそれを懸命に考えるんやな」
「それでどうなった」
「どうもならんうちに、目がさめた。腹がいたかった。ひょっとしたら、毎日腹がいたくて目がさめるから、軽いジュウニシチョウカイヨウかも知れんな」
「馬鹿ばかしい。何もはっきりせんではないか」
「そうや。はっきりせんから困ってるんや。何しろ、四人組のクーデター騒ぎというのは判らん。華国鋒の方が上杉征伐に出かけて、四人組がそのわなにかかってクーデターはじめようとしたのかも知れん。すると、とんだ三成ということになるなあ」
「それで関ヶ原合戦というわけか。合戦がないではないか。そのたとえは余りピッタリ来ないよ。判らんね、その夢」

「しかし、おれは夢の中で、何かを推理し、何かを判断し、行動に踏み切らぬ内に目がさめた。冴えんなあ。すっきりせんわいな」
「すっきりどころか、漠然そのものだね。たった、それだけか」
「しかし、陰謀やわなにひっかかるまいと汗かいた」
「勝手にしろ」
「今日も見たんや。あれは何やったかいな。うん、あれは世界の最期ということやったな」
「古いねえ。そんなの、もう流行おくれだぜ。三年か五年位ずれてる」
「議論はずれてるか知れんけどな。現実は目下進行中や」
「いやになるねえ。ごたごたいうことが古いというんだよ、そんなこと。きまり切ったことではないか。が、まあいいや。伺いましょう、今日のを」
聞かれた瞬間、頭をさぐると今日のが白く消え跡を残してぽわっと紛れ失せているのに気がついて、あわてた。黙っているより仕方がない。
「妙な目付をするね。まるで頭の中をさぐり廻ってるような目付だぜ」
「それをやってるんや、実は」
「何をさがしてるんだね」
「今日の夢をよ」
「ケッ。おそれ入るねえ。お主みたいな変な野郎には付き合い兼ねるよ。いやになるねえ。頭の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com